

# 身体的ハンディキャップを持つ学生のフィールドワーク実習

辻信一（代表） 福岡女子大学 国際文理学部環境科学科 教授  
竹内亮 福岡女子大学 国際文理学部環境科学科 講師

## 1. 調査目的：身体的ハンディキャップを持つ学生が、環境政策分野のフィールドワークを安全に実施するための検証を行う。

本学では、これまでハンディキャップのある学生がフィールドワークに参加したことがなく、教員、職員、学生にこれに対応するノウハウがない。一般的な介護に関する教本は、市販されているものの、実際のフィールドワークに活用できる部分は限られている。そこで本研究では、実際の講義におけるフィールドワークの中で、模擬的にハンディキャップのある学生が参加する状況を作り、ハンディキャップのある学生がフィールドワーク実習に参加する場合、充実した内容にするためにはどのような留意点があるのかを検証した。



本調査内では福岡女子大学保健室の備品である折り畳み式車いすを利用した。

## 2. 調査内容：模擬検証

2021年度の1年間を研究期間とし、数名の調査を担当する学生の協力を得て、現地の研究機関、公益財団法人、JR九州および現地の介護タクシー会社などの協力のもとで、実際に学生が車いすに乗車した状況でフィールドワークを実施した。実地研究では研究分担者の田尻（熊本学園大学）の指導、協力者の阿蘇グリーンストックのアドバイスを受けつつ行った。内容については、写真、ビデオなどの記録に収録して持ち帰り、検討資料とした。

収集した資料をもとに、研究者及び学生全員で検討を行い、配慮すべき点、注意点を抽出し、ハンディキャップのある学生に対する支援の要点及び課題をまとめた。

### ■実施した調査：

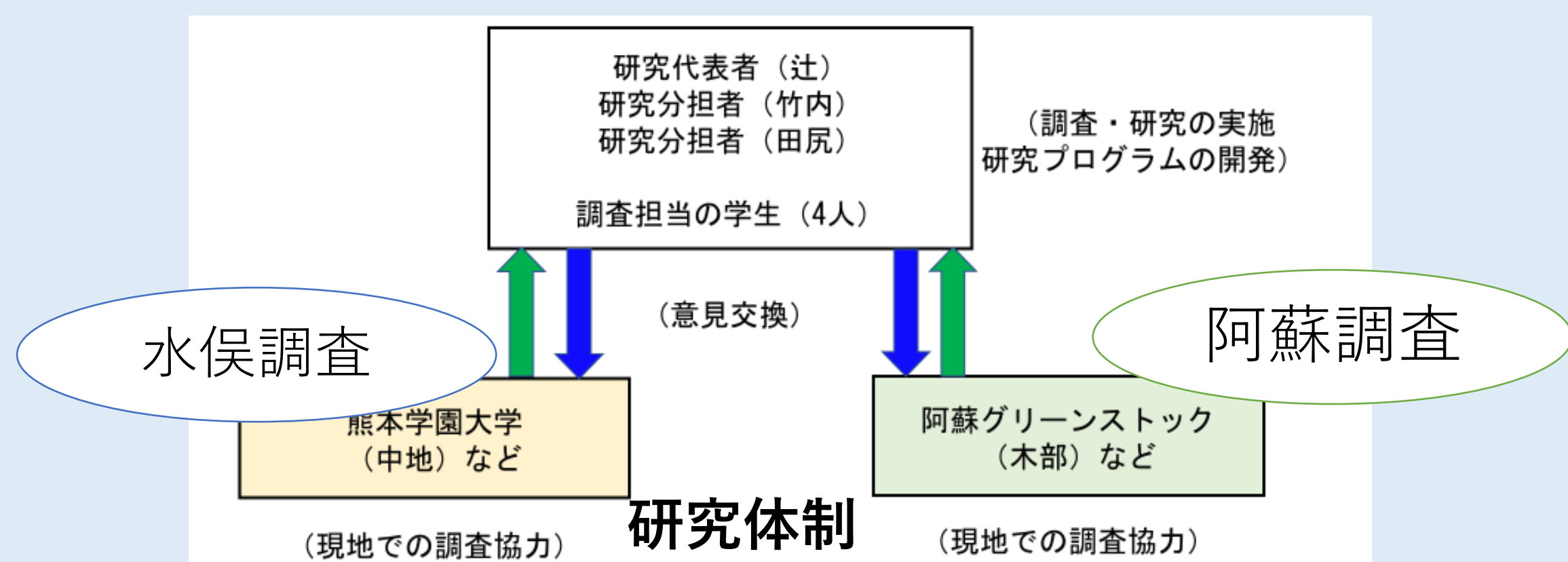
10/15-16 阿蘇における草原レクリエーションにおける検証

10/28 九州電力八丁原地熱発電所での施設見学および自然散策

11/30-31 水俣における公害学習

### ■主な検証項目

1. 移動および宿泊施設の利用の際の注意点（新幹線および在来特急、タクシー、歩道の移動、館内の移動）
2. 既存の現地学習内容の場合、学生の介助でどの程度の参加が可能か
3. その他日常生活における全般的な介助



## 3. 結果：見つかった課題

### 移動および宿泊について：

フィールドワークの性質上、移動は重要な検証事項となる。

#### ①公共交通機関について

鉄道の場合、新幹線の場合は駅員の補助を得られるが、在来線の場合、車両設備および下車駅の人員配置等により自分たちでの対応が必要となる。阿蘇においては介護タクシーを利用することで、駅から宿泊施設への移動は問題なく行えた。しかし、台数が少なく予約を取るのに手間を必要とした。いずれの場合もJRやタクシー事業者との事前の調整が不可欠である。そのため、急な予定変更は困難ということがわかった。

#### ②歩道の移動

農村地域では舗装されていない道路も多いため、学生の介助による長距離の移動は負担が大きいことがわかった。

#### ③宿泊施設について

阿蘇ではバリアフリー対応のホテルに宿泊をしたため、車いすでの利用に大きな問題はなかった。一方で水俣では、非対応の旅館に宿泊したが、入口の段差や部屋までの動線において、学生の介助では移動が極めて困難な箇所が多い。

### 現地学習への参画について：

#### ①施設見学やヒアリングについて

今回の訪問した学習施設では、いずれの場所でも車いす利用者を想定した造りとなっていた。そのため、学生の介助でも大きな問題はなかった。

#### ②屋外アクティビティについて

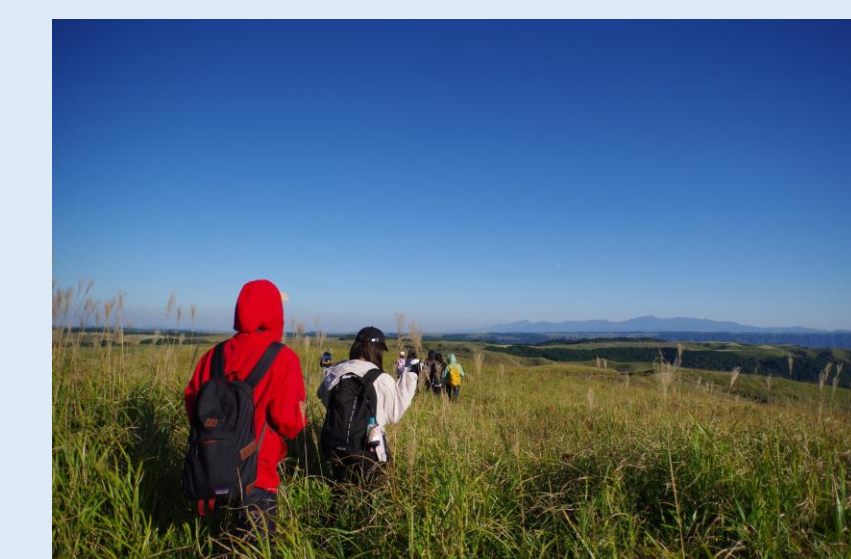
普段より実施している、自然散策等のガイドツアーを行ったが、車いすでの参加は不可能であった。



フィールドワークで用いる研修施設では、バリアフリー対応のものも多い



介助がいなくても、普段から車いすを使用している学生であれば自由に移動が可能。



トレッキング等は電動であっても車いすでは移動困難。また車での同行も不可能。



自然散策等は1-2時間を要することが多いので、参加できない場合に代替する学習内容を検討する必要。

### 介助について：

ハンディキャップの内容にもよるが、トイレおよび入浴設備の利用には学生の介助では困難であり、同性の専門的な介護者の同行が必要ということがわかった。



バリアフリー対応のトイレであっても介助者の同行が必要。



大浴場の利用は困難な場合が多く、個室に浴槽および介助者の存在が重要。

## 4. まとめ：身体的ハンディキャップを持つ学生が、環境政策分野のフィールドワークを安全に実施するために

被介護者となるモデルの学生を用いた実地実習を行った結果、特に考慮すべき課題として明確になった事項は次のとおりである。

### ①参加学生への事前研修

多くの学生が車いすの操作等に知識を持っていなかった。そのため、場面ごとの介護者の決定を含め、事前の研修をしっかりと行うことが重要である。

### ②現地学習内容の工夫

ハンディキャップを持つ学生が参加不能な部分がある。その際、有効に時間を利用する方法の検討が必要。教員の意識はハンディキャップのある学生に集中しやすい。他の学生のフィールドワーク実習の達成にも配慮する必要がある。

### ③大学としての支援の必要性

宿泊施設の制限などの費用面を含め、講義担当の教員の裁量のみでは安全かつ充実したフィールドワークの実施は困難である。大学全体としてこのような機会を想定した仕組みづくりが望ましい。